

## 論文審査の結果の要旨

氏名：西山浩次

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名：キャリア支援者としての体験・学習経験の効用 —多様な職業・キャリアコミットメントの高まりの様相の探索的研究—

審査委員：(主査) 教授 田中堅一郎

(副査) 教授 島田めぐみ

教授 階戸照雄

### 論文審査要旨

#### 1. 本論文の構成

本論文の構成は、以下の通りである：

第1章 研究の意義・目的

第2章 これまでの研究のレビュー

第3章 キャリア意識・コミットメント・行動変容を捉える手法

第4章 キャリア講師体験の PAC 分析①：受講前後の変化（研究①）

第5章 キャリア講師体験の PAC 分析②：行動変容の要因（研究②）

第6章 キャリア講師体験の PAC 分析③：価値観階層の探索（研究③）

第7章 キャリアコンサルタントの養成受講経験の PAC 分析（研究④）

第8章 キャリア支援者のコミットメントの SCAT を援用した分析（研究⑤）

第9章 総合考察

引用文献

謝辞

附録①：PAC 分析でのインストラクションシート（研究③で使用）

附録②：SCAT の分析ワークシート

#### 2. 本論文の概要

本論文は、高校生へのキャリア講師およびキャリアコンサルタントというキャリア支援を担う人びとがキャリア教育企画・実施プログラムに参加した経験、キャリアコンサルタントの養成プログラムを受講した経験を通じて、キャリア意識、職業・キャリアコミットメントがどのように変化するかをテーマとしている。分析手法として、個人の認知・意識面の分析にクラスター分析を援用して質的分析を行う PAC 分析（個人別態度行動分析）を基軸にし、さらに PAC 分析を通じた複数の個別事例から共通する要素や個別の違いを明らかにするために SCAT(Step for Coding and Theorization)というステップコーディングによる質的データ分析手法も活用された。

本論文の構成は、まず第1章において本論文の目的が述べられ、第2章と第3章において、これまで申請者自身の行った研究を含めたキャリアコミットメントに関する先行研究が展望された。

第4章から第6章においては、高校生のキャリア教育を企画・実践するプログラムに参加した社会人講師が、どのような職業・キャリア意識や態度に変化が生じるのかについて探索的検証が行われた。プログラム受講前後での変化を捉えるため、PAC 分析を用いてクラスター分析の結果であるデンドログラムの変化を捉えた。まず、調査協力者が PAC 分析の手続きで自由連想項目を記述した後に「プログラム受講前の考え」「プログラム受講後の考え」という追加項目を加えた。追加項目を含まないデンドログラムを通じてプログラムに参加することによる意識変化を捉えたのちに、追加項目を加えたデンドログラムを示すことで、プログラムに参加することで明確になった仕事やキャリアに対する意識や行動が明確にされた（第4章）。第5章では、2名の調査協力者の参加を得て、第4章で追加した「プログラム受講前の考え」「プログラム受講後の考え」に加えて、仕事やキャリアについてのコミットメントにつながる行動を探索するために、「仕事やキャリア開発につながる行動」という追加項目を投入して PAC 分析を行った。その結果、2名の調査協力者から中長期的なキャリアに対するコミットメント行動、現在の仕事に対するコミットメント行

動が明らかにされた。第 6 章では、プログラム参加による意識面・行動面の変化に加え、Bergman et al.(2013)が示したコミットメントの形成・発達のメカニズムをもとに、「プログラム受講後の考え」、「仕事やキャリア開発につながる行動」「キャリア上ゆずれない考え」といった 3 項目の追加項目を加えた分析を実施した。これらの追加項目を含まないデンドログラムと追加項目を加えたデンドログラムの比較を通じたインタビューを実施し、2名の調査協力者のプログラム参加を通じての仕事やキャリアに対する意識・行動の変容及び仕事やキャリアに関する価値観を明らかにした。第 7 章では、キャリアコンサルタントの養成プログラムの受講者が、学習し得られたテーマ、その中でも今後の専門職としてのアイデンティティの中核となると思われる考えや、受講経験を通じて改めて自分にとって不足していた、あるいは不十分だったテーマを自ら探索し、プログラムを受講した結果何が受講者の学習の促進要因になっていたかが検討された。

第 8 章は、キャリア支援者のキャリアコミットメントがどのように形成されるのかを明らかにすることを目的として、高校生へのキャリア講師を行った社会人 4 名とキャリアコンサルタント養成講座受講者 2 名のキャリア支援者に共通するコミットメント形成のメカニズムを探索した。本章では、質的分析方法の一つである SCAT を援用した。分析の結果キャリア講師のキャリアコミットメントに関しては中長期的なキャリアと現在の職務に関するコミットメントが高まったことが見いだされた。キャリアコンサルタントに関しては実務経験者と実務未経験者ではコミットメント及びそこから起因するアイデンティティの現れ方には違いが見られたものの、共通するコミットメント要素の存在が示唆された。

第 9 章では、まず第 8 章までの内容が要約され、本論文で得られた検証結果が総括された。次に、PAC 分析の結果と SCAT を援用して得られた結果から、コミットメント形成・発達のメカニズムの主要概念である価値観及び価値観階層、コミットメント要素とコミットメントの関係性について考察が行なわれた。さらに、実践における示唆として、今後の良質なキャリア支援者を輩出するための養成機関やプログラム運営の企画者やトレーナーがどのようなガイドラインを持つべきかについて提言がなされ、最後に本研究で得られたことと本研究の独自性、そして今後の方向性について述べられた。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文での成果は以下のように集約される：

- (1) これまでのキャリア研究において、キャリア支援される人びとについての研究は数多いものの、本研究はキャリア支援を行う人びとを研究対象としていること、またキャリア支援された人びとの態度や行動の変化を捉えた研究がこれまで殆どを占めていたが、本研究はキャリア支援することによって支援者もまた自分のキャリアの考え方が変わっていくことを示した点がユニークであり、研究課題の新奇性は評価できる。
- (2) 本論文では面接調査で得られたテキストデータが丁寧に分析されていたが、これはキャリア研究、特に職業・キャリアコミットメントに関する過去の研究を精読された結果であるとみなされる。
- (3) 面接調査で回答者から得られたテキストデータの分析において、PAC 分析を用いることでクラスター分析を交えた量的分析を併用した点、さらに、キャリア支援活動の前後での変化を「追加項目」を加える分析を行うことによって明らかにする試みは評価できる。
- (4) 本論文ではキャリア支援者の職業・キャリアコミットメントの変化に着目して面接調査が行なわれたが、その結果、キャリア支援者が自己のキャリアを振り返って「自分の考え方が整理」され、再認識できるという副産物もあった。

一方で、本論文にはいくつかの問題点が認められる。

まず、章の内容がそれぞれ独立していたためか、章ごとに学術用語の表現が異なる箇所が見いだされた。また、ある章で示された記載が別の章にも殆ど同じように記載されていた。こうしたことにならないためにも、本論文全てを俯瞰しながら章ごとの内容を考え、学術用語の使い方にも注意すべきだっただろう。

次に、本論文での分析結果の性差について言及されていなかったが、キャリア支援者の態度変化に性差は見いだされなかったのだろうか。それとも本論文での回答者が少なかったため、性差は個人差に収斂したのであろうか。

また、キャリア支援者の態度変化が一度や二度の講習会の経験で大きく変わるものなのだろうか。むしろ、これらは幾度かの経験を通して経時的に変化するものではないだろうか。もし本論文が職業・キャリアコミットメントの発達研究として位置づけられるとすれば、キャリア支援者の中核となるアイデンティテ

ィの変容は長い時間を要すると考えるのが自然ではないだろうか。職業・キャリアコミットメントの時間的推移についても言及すべきだっただろう。

さて、既述のように本論文にはいくつかの問題点や不十分な点が残されてはいるものの、それらは本論文の学術的成果の価値を損なうものではない。本論文での論文提出者の試みは十分に達成されていると思われる。

以上のことから、ここに審査員一同は、本論文が当該分野の研究に寄与するに十分な成果を挙げたものと判断する。よって、本論文は博士（総合社会文化）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和2年 1月 23日